B　五目牛南組遺跡出土の染付鳥餌入について

大　橋　康　二

五目牛南組遺跡から出土した鳥餌入(実際は水入れとして使われたものらしい)[注1]は2個あるが、2点共同様の特徴を見せる(図1・2)。型によって上下別々に作ったものを貼り合わせて太鼓形に成形され、その側面に格座間形の穴を開け、2つの環耳が貼付けられている。胴部と側面の主文は花唐草文であり、胴部の縁辺に渦連続文が染付されている。格座間形の口部の下に二重の枠で区画したなかに「宣徳年製」の4文字が書き込まれている。全面に施釉されているため、焼成する際の窯詰めには特別の道具を用いたらしく、胴部に4個の径1㎜程の熔着痕がみられる。これは釉調・作行などからみると中国産である。そこで中国製の鳥餌入の例を次にあげて比較検討を加えたい。

1　今知る限りで古い例としては、南シナ海の沈没船から引揚げられた陶磁器中に1点ある[注2](図3)。器形は五目牛南組遺跡のものとは異なり、口径6㎝の小壺形であり、胴部に2つの環耳が貼付けられている。胴部に花唐草文、肩部に波涛連続文が染付されている。写真では判らないが、説明文に宣徳マークが入っていることが記されている。この沈没船は1643年に沈んだとみられ、崇禎16年(1643)の年号が染付されたものなどが一緒に引揚げられていることから、この染付鳥餌入の年代も崇禎頃と推測される。

2　1と同様に小壺形の鳥餌入が東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点から出土している[注3](図4)。尖底状の小壺であり、「口縁部は無釉」と記述されているので覆焼きしたものとみられる。1の小壺形鳥餌入も写真をみると口唇部無釉であり、写真ではよく判らないが尖底状に作られているのかもしれない。東大出土例はやはり胴部に2つの環耳が貼付けられている。胴部に呉須の線描きで花唐草文が描かれている。葉や花も線描きだけで塗り濃みを施さない装飾法はペンシル・ドローイングと呼ばれているものであり、この独特の唐草文は18世紀～19世紀前半にみられるが、花の部分や細部の描き方は19世紀のものと異なるので、この餌入の花唐草文は18世紀と考えることができる。しかし、2が出土した49号遺構からは1820年～幕末の国産磁器が出土しており、遺構の主たる年代は1820年～幕末と推定される。

3　2と同様のペンシル・ドローイングタイプの花唐草文を描いた太鼓形の鳥餌入がある(図5)。長軸9㎝、短軸5.6㎝。図1・2と同様に型作りであり、格座間形に口を切っている。2つの環耳を胴部に貼付け、その環耳を中心にして4個の窯詰め時の道具の熔着痕がみられる。胴部の両端には雷文帯が染付されている。本遺跡出土例との違いは、①窯詰め時の道具の熔着痕の位置が双耳部分を中心にしていること、②長さが長く、胴部の張りが大きいなど形状の違い、③双耳の根元に花様の貼付け文がないこと、④釉調、呉須の発色が異なること、⑤文様が違うこと、などである。年代は文様が2に近いことなどから18世紀後半～19世紀前半と推測される。これは筆者が上海で入手したものである。

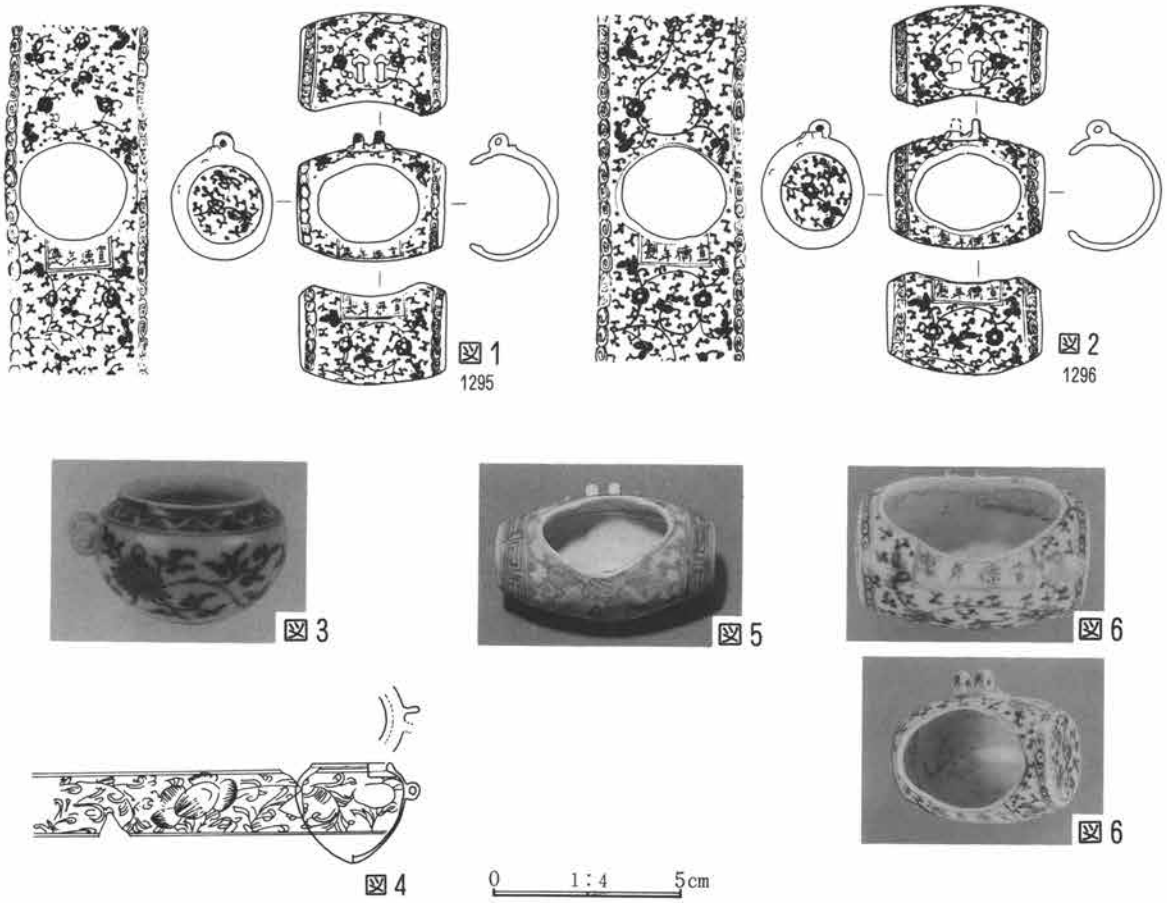
4　五目牛南組遺跡出土品ともっとも近似した太鼓形の鳥餌入である(図6)。長軸7.1㎝、短軸5.2㎝。側面に格座間形の穴を開け、2つの環耳が貼付けられている。やはり胴部と側面の主文は花唐草文であり、胴部の縁辺に渦連続文が染付されており、格座間形の口部下に「宣徳年製」の4文字が書き込まれている。さらに胴部に4個の道具の熔着痕があるのも同様である。「宣徳」とは中国・明の1426～35年の年号であるが、明末の中国民間窯磁器が古い年号を用いることが多く、その影響を受けた肥前・有田磁器も同様に中国の古い年号を盛んに用いた。本遺跡出土品や4に施された「宣徳年製」の年号銘は作られた年代を示すものではない。これも筆者が上海で入手したが、同治(1862～74)ごろのものと表示されていた。

5　愛知県陶磁資料館には8点の中国製鳥餌入があり、そのうちの1点が太鼓形である[注4]。実見していない

が、図録をみると、色絵で騎馬人物を描いている。

以上が現在知られる中国産鳥餌入の例である。これらのうち4が釉調、作行も含めて本遺跡の鳥餌入ともっとも似通っており、縁辺の渦連続文などの描き方に若干の違いが認められる程度である。

このように環耳を貼付けた磁器の餌入はすでに17世紀にあったが、太鼓形の餌入は18世紀以降の例が知られるだけである。国内遺跡出土の中国製餌入としては、現在2の東大構内遺跡の例と本遺跡の例が知られるだけであるが、2の方が前述のように古い年代とみられる。2が出土した49号遺構は伴出磁器から1820年～幕末の遺構とみられるが、多くの瀬戸・美濃系陶器の鳥餌入が出土している。そのうち1点の底部には「御鳥御用」の墨書がみられる。これらの陶器餌入は小さな桶状の胴部に1つの環耳が貼付けられている。肥前磁器窯では、鳥餌入の出土例は現在までみないが、熊本城跡の調査で白磁の例が瀬戸・美濃の餌入と共に出土している。[注5] 肥前窯製品の可能性がもっとも高い。形状や環耳が1つである点などからみると瀬戸・美濃陶器の餌入を手本として作った可能性がある。いずれにしても、国内では都市部を中心に近世後半になると飼鳥が盛んに行われるようになるなかで、こうした陶磁器の鳥餌入の需要がだんだんと増えたことが推測される。

本遺跡例はそうした状況下で、当時珍しい中国磁器の鳥餌入の出土例として注目される。

注1．小林克『「鳥のえさいれ」について』江戸遺跡研究会会報№15、1988
2．Colin Sheaf & Richard Kilbun "THE HATCHER PORCELAIN CARGOES",Phaidon Christiés, Oxford, 1988
3．東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学本郷構内の遺跡　山下会館・御殿下記念館地点』1990
4．愛知県陶磁資料館『愛知県陶磁資料館所蔵品図録』1988の427頁
5．筆者実見、担当の大田幸博氏に謝意を表す。